

感情動詞のテンス・アスペクトについての一考察

— 怒りを表す動詞（句）の場合 —

馬場 典子

キーワード 感情動詞、テンス・アスペクト、人称、テイル形、報告性

1. はじめに

本稿の目的は、感情を表す動詞（以下「感情動詞」という）のテンス・アスペクトについて考察することである。この「感情動詞」を扱う際、問題となるのが「テンス・アスペクト」と「人称」である。この「感情動詞」を扱った先行研究はある（寺村（1982、1984）、町田（1989）等）が、いずれも「感情動詞」の範囲を明確にしていないことや、上記の問題について包括的に扱ったものではないことから、結果として「感情動詞」の性質が十分に明らかにされていないのが現状である。しかしまた「感情動詞」全体について詳細に検討することはその範囲の広さから容易でないことも事実である。こうした点を踏まえて、本稿では主にテンス・アスペクトに関する先行研究を援用しながら、感情の1つである「怒り」を表す動詞および動詞的なふるまいをする句（以下「動詞（句）」という）を取り上げて考察する。そして感情動詞の一側面を具体的に把握することを目指す。

2. 感情動詞のテイル形・基本形^(註1)・夕形に関する考察

2.1 本稿で用いる用語と考察対象の動詞（句）

考察に入るにあたり、まず本章以降で用いる用語についてここで確認しておく。本稿での「感情主」とは、感情を持つ主体を指し、「報告者」とは感情主の感情を観察して報告する機能を担う人を指すものとする。また本稿で扱う怒り

^(註1) 「ル形」という表現もあるが、すべての動詞が「ル」で終わるわけではない（例：腹が立つ、むかつ、等）ことから、本稿では「基本形」という表現を用いる。尚、先行研究で「ル形」という表現が用いられている場合、その記述をそのまま引用するが、筆者が先行研究を要約する際には「基本形」を用いるものとする。

を表す動詞(句)は「オコル、イカル、ハラガタツ、ハラヲタテル、アタマニクル、イキリタツ、イキドオル、フンガイスル、ゲキドスル、ギャクジョウスル、シャクニサワル、カンシャクヲオコス、ハラワタガニエクリカエル、ハラニスエカネル、カンニンブクロノオガキレル、ムカツク、キレル」とする^(註2)。

2.2 テイル形に関する考察

2.2.1 テイル形のアスペクト的意味^(註3)について

「テイル」形の意味については、井上(1989)が以下の5つを挙げている^(註4)。

- (1) すずめが飛んでいる。(進行相)
- (2) すずめが死んでいる。(結果状態相)
- (3) この中では彼の作品がもっともすぐれている。(形容詞的)
- (4) 芥川はその年三度家出している。(回想を表す)
- (5) 花子は包み紙を一つ一つていねいに広げている。(反復相)(p.182)

(1)の「飛ぶ」は継続動詞であり、これに「テイル」がつくと、その動作の進行を表す。(2)の「死ぬ」は瞬間動詞であり、これに「テイル」がつくと瞬間に起こった出来事の結果の残存を表す。(3)は金田一(1976)の「第四種の動詞」に当たるものである。すなわち(1)と(2)は、それぞれ動作の進行、出来事の結果の残存を表し、(3)は形容詞と類似した性質により、もとの状態を表している。この様に(1)～(3)は動詞の性質から見た「テイル」形の意味であるが、(4)や(5)の様に瞬間動詞や継続動詞であっても、テイル形が過去の出来事を回想するという「回想」、「花子が包み紙を広げる」という行為の「繰り返し」を表すこともできる。では本稿で考察する「怒り」の表現は、テイル形にするとどの様な意味を表すのだろうか。例を見てみよう。

- (6) (フェリーの座礁事故で乗客が船内に閉じこめられた)「船内では、状況をほとんど知らされなかった。六時間も待たされて、みんな

^(註2) 分析対象語句の選定にあたっては、中村編(1993)と宮地編(1982)を参考にした。怒りを表す表現は他に「むくれる」「ふくれる」「爆発する」等も挙げられるが、これらについての考察は今後の課題である。

^(註3) アスペクトとは、「動詞の表す動きを丸ごと捉えるのか動きの中に分け入って過程を広げた形で捉えるのか、展開局面のどの部分を捉えるのかといった、動詞の表す動きの全過程のどの局面に焦点を置いて、その動きを捉え・表現するかを表し分けるための動詞の形態変化に関わる文法カテゴリ」(仁田(1987:88))であり、「テイル」は、日本語のアスペクト形式の代表的なものだと言える。

^(註4) 「テイル」形の意味については研究者間で設定が異なっているものもある。例えば柳沢(1994)は、回想の代わりに「経験」を取り上げており、町田(1989)は「反復相」を認めていない。

怒っている。」(1999. 7. 27『朝日』)

(7) 吉良の首をいつとるのだと家臣たちがいきりたっております。

(1999. 7. 11『元禄繚乱』)

(6) も (7) も「オコル、イキリタツ」という感情の生起した状態の継続を表していると言える。では次の様な例はどうであろうか。

(8) (応援している野球チームのA選手がつまらないミスをしたことでサヨナラ負けをしてしまった。)

- a. (私は) A選手のミスにムカツク。
- b. 私はA選手のミスにムカツイテイル。
- c. *太郎はA選手のミスにムカツク^(注5)。
- d. 太郎はA選手のミスにムカツイテイル。

(8) a. は、1人称感情主の場合であり、基本形で発話時点での状態を表せるが、(8) c. の3人称感情主の場合、基本形では非文になり、(8) d. の様に「テイル」を伴わないと表せない。それは何故なのだろうか。また、1人称感情主の場合、(8) b. の様に「テイル」形を伴うことも可能である。それでは、この(8) a. と(8) b. の文の意味の違いとは何なのだろうか。これらの疑問に対し、「[「テイル」が状態の継続を表している]ということだけでは、妥当な説明は与えられない。例文(1)～(5)の様なテイル形のアスペクトの意味以外の機能については、既に寺村(1984)、工藤(1995)、堀川(1991)によって示唆されてはいるものの、詳細な検討は未だされていない。従って本稿では更に詳しく「テイル」の意味を検討するため、柳沢(1994)による「非アスペクトの意味」^(注6)としての「報告性」の概念と鷺見(1996)による「テイルの基本的機能」を援用し、上記の例の妥当な説明を試みる^(注7)。

2.2.2 テイル形の「非アスペクトの意味」について

(I) 「報告性」の前提となる概念—金水(1989)による「報告」

柳沢(1994)を扱う前に、この「報告性」の前提となっている概念として金

^(注5)文頭の*はその文が非文であることを示す。

^(注6)「非アスペクトの意味」とは柳沢(1994)による用語である。

^(注7)管見の限りでは、この「テイル」の報告性について初めに示唆したのは仁田(1978)であると思われる。仁田は、「[「テイル」には持続を表す場合と、そういった持続した状態が外的な態度、表情、言動によって知覚化できる状態になっている場合とがある。](p. 8)とし、「テイル」に内的な状態を外化させる意味があることによって、第三者の感情が知覚可能になり、話し手によって報告可能なものになることを指摘している。

水 (1989) の「報告」を見ておくことにする。

金水は、「小説や昔話などの地の文の中は、誰の心理状態でも自由に描写できるのであるから、人称制限ははじめから存在しないのではないか。」(p. 123) とする。これは「視点」という言葉を用いれば、話し手が自由に登場人物のなかに入って、その登場人物の「視点」で語っているため、どの感情主であっても 1 人称感情主の文の形で描写が可能になるということである。しかし、このような現象は日常的な会話においては起こり得ない。そこで金水は、小説や物語の文を「語り」と呼び、日常的対話で聞き手にある状況を知らせる行為またはその言表を「報告」と呼んで区別した。そして、以下の仮説を立てている。

(9) 他人の心的状態を直接知ることはできない。

(10) 日本語では、報告の際に、直接知ったこと、または話し手が直接決定できることと、そうでないことを文の形式の上で区別しなければならない。 (p. 123)

金水は、(10) の形式的な区別の主たるものとして「らしい／ようだ」等のモダリティ成分^(注8)の有無を挙げている。ここでは 3 人称感情主の感情を報告するのになぜ「テイル」が必要なのかについては具体的には述べられてはいない。しかし、少なくとも 1 人称感情主の文の時には必要のなかった「テイル」が 3 人称の時には必要であるということは、「テイルが他者の報告の際に何かの機能を果たしているということを示唆している様に思われる。

金水は、更に動詞「悲しむ」「笑う」「信じる」の 3 つについての「報告」について触れている。ここでは感情動詞である「悲しむ」を例に挙げる。「悲しむ」が伝える状況については次の様な相の重なりとして捉えられている。

(11) a <悲しい>という心的状態

b 悲しげな表情や動作

c 「ああ、悲しい」などの発語行為

(p. 125)

金水は、「我々は a を直接知ることができない。しかし、b c は外部から観察可能である。(「山田はひどく悲しんでいた」または「山田はひどく悲しんでいる」という文で) 報告されていたのは、b および／または c ということになる。逆に言えば b c が観察されれば「悲しんでいる (た)」と報告してもよい、ということである。」(p. 125) (下線の括弧内は引用者による補足) としている。

^(注8) 「モダリティ」とは、「現実との関わりにおいて、発話時に話し手の立場からした、言表事態一文の対象的な内容に対する捉え方、および、それらについての話し手の発話・伝達的な態度のあり方を表した部分」(仁田 (1999: 35)) のことを指す。

(Ⅱ) 柳沢 (1994) 「テイル形の「報告性」」

柳沢は、前節で述べた金水の「報告」の概念が従来の「テイル」形の意味では説明できない意味・用法を説明可能にする^(註9)ものであるとし、「報告性」についてまず以下の様に仮定する。

(12) テイル形は次の意味を表す。

①話し手は何らかの現象を観察している。

②言表は観察結果の報告である。 (pp. 170-171)

その上で「報告性」について、スポーツ実況でテイル形が使われないことを例に挙げながら更に次の様に説明する。

(13) バッター打ってショートゴロ。ショート取って一塁へ送ります。

(14) 霧島、引きつけて出ます。寄った。寄り切り。

しかし上の文をテイル形にすると、以下の様な臨場感に欠けた表現になってしまうことが示されている。

(15) バッター打ってショートゴロ。ショート取って一塁へ送っています。

(16) 霧島、引きつけて出ています。寄っています。寄り切り。

柳沢は「「観察結果の報告」とは、単に五感によって得た情報を述べるというだけでなく、観察によって得た情報を頭の中で処理した上で述べるということまでを意味する。つまり、テイル形は、言表が何らかの形で処理された二次的な情報であるということの意味するのである。」(p. 171) (下線は原文のまま)とし、テイル形の意味を以下の様に改めて定義する。

(17) ①話し手は何らかの現象を観察している。

②言表は観察結果の報告である。

③言表は二次的な情報である。 (p. 172)

「テイル形がスポーツの実況において使われないのは、一次的な生の情報が、テイル形によって二次的な情報に変えられてしまい、情報の鮮度を落としてしまう」(p. 171) からだと柳沢は指摘する。また、基本形^(註10)やタ形は③において一次的情報を表すのに対し、テイル形は二次的な情報を表すことが、基本形・タ形とテイル形の違いだと述べている。

この論文ではアスペクト的な意味である「時間の経過」については触れられていないが、テイル形は「観察によって得た情報を頭の中で処理した上で述べ

^(註9)柳沢は、「報告性」の概念によって、①動作主の三人称化、②引用、要約におけるテイル形の使用、③解説文におけるテイル形の使用、④経験におけるタ形との互換性と不換性、が説明可能になるとしている。

^(註10)柳沢は「ル」形と表現している。

る」ことであるから、当然そこにはある一定の時間の幅があると考えられる。その意味ではテイル形には「報告性」と「継続性」が併存しており、文の指し示す状況によって、「報告性」が際だつことがあったり、「継続性」が際だつたりすると考えるのが妥当だと思われるが、この点については更に考察を重ねる必要がある。

2.2.3 鷺見 (1996) 「テイル形の基本的機能」

鷺見は、「感情・感覚や思考等内的状態を表す動詞は、基本形^(註11)では話者以外を主体とすることができないが、テイル形にすると第三者を主体にすることが可能である」とし、なぜテイル形だけが話者以外の内的状態を表せるのかという理由を、「テイル形が継続相を表す」ということだけでは説明できないとする。以下は鷺見の挙げた例である。

(18) わたしはわくわくする。

*太郎はわくわくする。

太郎はわくわくしている。

(p. 42)

そして鷺見は(内的状態を表す動詞だけでなく)すべてのテイルの基本的機能について以下の様に仮説を立てる。

仮説1: テイルの基本的機能とは「ある基準時におけるある事態の成立が確実にあることを話者が発話時に認知^(註12)可能であることを表わす」ということである。(p. 44) (下線は引用者)

更に鷺見は仮説1を話者の立場に置き換えて仮説1'を提示する。

仮説1': 話者はある基準時におけるある事態の成立を知覚^(註13)し、思考、判断を介して認知した時、その事態が確実にあるとして聞き手に提示するためにテイル形を用いる。(p. 45) (下線は引用者)

この2つの仮説を基に、鷺見は内的状態を表す動詞のテイル形について次の様に述べている。

内的状態を表す動詞の場合は、ある表情、態度、言動を知覚した話者がそれをある感情・感覚、思考の現われであると判断し、その感情・感覚、

^(註11) 鷺見は「ル」形と表現している。

^(註12) 「認知」については、鷺見は池上(1993: 745)を参考に以下の様に定義している。「認知: ある事態を自分との関連の中でとらえ、その意味づけをする。より受動的な「知覚」に、より能動的・主体的な営みである「認知」が後続する。」

^(註13) 「知覚」についても、池上(1993: 745)を参考に以下の様に定義している。「知覚: ある事態を五感によって意識下におく。しかし、自分に関係づけたり、意味をとらえたりはしていない。」

思考の成立を確実なものとして言語化する時、テイルを用いる。つまり話者の確信の高い押し量りを表すに過ぎない。それがモダリティの意味である。(p. 57、引用者による要約)

鷲見によれば、柳沢の「テイル形の報告性」とは、話者の高い押し量り^(註14)という心的態度である「モダリティ的意味」を持つものだということになる。では鷲見が挙げた3人称感情主の例を見ておこう。

(19) 弁護士の試験に受からなかったので、彼はクサクサしている。

(p. 57)

報告者は、「彼」の表情や言葉から、「クサクサする」という感情の現れであると判断し、その「クサクサする」感情の成立を確実なものとし、「テイル」を使って報告するということになる。また、1人称感情主の場合について、鷲見は次の様に説明している。

一人称の場合、自分の内的状態を知るのに証拠は要らない。そこで、内的状態の知覚と同時に、何の思考、判断も介在させずに発話すればル形となり、逆に知覚してから自分自身に問いかけ、その思考、感覚の成立を確認したような場合であればテイル形となる。(中略) たとえ、自分の感情であってもそのとらえ方にはレベルがあると言える。知覚のレベルで言語化したものがル形で表わされ、認知のレベルで言語化したものがテイル形で表現される。(中略) 感情とは本来誰にとっても主観的なものであるが、その主観的なものを主観的に表現するか、客観的に表現するか、つまり、確認、判断を介在させず表現するか、介在させて表現するかがル形とテイル形の違いなのである。(pp. 58-60) (下線および括弧内は引用者)

では鷲見の挙げた1人称の例を以下に引用する。

^(註14) 鷲見はテイル形による話者の確信度の高さについてニュースレポーターの例を挙げ、「銃声が聞こえています」という発話は「銃声が聞こえます」よりも、レポーターの確信がモダリティの意味として表れているためインパクトが強いと説明している(p. 59)。これに対し柳沢のスポーツ中継の例(本文(13)～(16))では基本形の方がインパクトが強かった。このことは、伝えるべき情報によってテイル形か基本形かの選択が異なってくるものと思われる。「銃声が聞こえる」ことは正確さが求められている情報であり、他方スポーツ中継は、正確さよりも(あたかも視聴者がその場にいるかの様な)臨場性を求められている情報だと言える。つまり、「認知」し確信度を増すことよりも「知覚」が重視されているのである。また、目の前で激しい銃撃戦が行われており、身の危険を冒しながらレポーターが中継する時には、「ものすごい銃声があります」より「ものすごい銃声がします」を用いるであろう。この場合はやはり正確さより臨場性が重視されるであろうし、身の危険にさらされていれば、「認知」しテイル形で報告する精神的余裕もなくなるとと思われる。

(20) A:「冷静だね。」

B: a. 「…そう見えないかもしれないけど、実はどきどきしてるよ。」

b. 「?? 「…そう見えないかもしれないけど、実はどきどきしてるよ。」 (p. 60) (下線は引用者)

(20) b. が (20) a. に比べて容認度が落ちるのは、自分自身の「どきどきする」という事態の成立を知覚、認知したからこそ、(Bのことを)「冷静だ」と思っている相手Aに対してその判断を否定することができるのだと驚見は述べている。

2.2.4 「怒り」を表す動詞(句)におけるテイル形の報告性

本節では先に見た柳沢と驚見の考えを基に、2.2.1(例文(8))で解決できなかった問題に戻って再考する。

(21) a. (= (8) a.) (私は) A選手のミスにムカツク。

b. (= (8) b.) 私はA選手のミスにムカツイテイル。

c. (= (8) d.) 太郎はA選手のミスにムカツイテイル。

(21) c. で「ムカツク」気分になっているのは感情主の「太郎」である。太郎が「ムカツク」気分になっていることを、太郎自身は「ムカツク!」と基本形でいうことができるが、それを他者が報告する場合は「テイル」形で報告することになる。この理由を柳沢のテイル形の「報告性」で考えてみると、次の様に言える。

「太郎がA選手のミスにムカツク」ことは太郎の心的状態であり、太郎にしか知り得ないものである。しかし、報告者が太郎の表情や言葉等を知覚し、それを頭の中で処理した情報、すなわち二次の情報として太郎の感情について報告する時は「ムカツイテイル」とテイル形を用いる。また、驚見の言葉を借りれば、報告者は太郎がA選手のミスを見て「ムカツク」という、「太郎の様子の現れ」であると判断し、その「ムカツク」感情の成立を確実なものとして「テイル」を使って報告するということになる。

更に (21) a. と (21) b. は感情主と報告者が同一の場合であり、(21) a. の様に基本形で発話時点の感情主の感情を表すことも可能であり、(21) b. の様にテイル形を使って表すことも可能である。この理由を、「報告性」の概念を使って説明すると、以下の様に言える。

まず (21) a. は感情主の感情の心的状態の表出を表している文であり、当然のことながら感情主にとって知り得ることである。それに対して (21) b. は「私が太郎にムカツク」ことをもう一度自分の中で捉えなおして、二次的情報

として他者に報告している文であると言える。よって臨場感としては(21) a. の方が強く出ており、(21) b. は自分の感情を客観的に述べている印象を受ける。

2.3 基本形に関する考察

2.3.1 発話時点の感情生起の状態を表す基本形

町田（1989）や井上（1989）等において、感情動詞は、発話時点での感情の生起の状態を表すには常に「テイル」を伴わなければいけないとされているが、怒りを表す動詞（句）の多くは以下に挙げる様に、基本形で発話時点の感情の生起の状態を表すことができる。

- (22) (97年の都議選を前に都内の駅前) 無職男性(七三) = 世田谷区
役人が不正やむだ遣いばかりしていて頭に来る。それをただしてほしい。(1997. 7. 5『朝日』)
- (23) (27年ぶりに母校の監督に復帰した高校の監督が) 六十三歳のいまでも自らノックを打つが、「外野へ打球が飛ばなくて腹が立つ」と笑う。(1999. 7. 20『朝日』)
- (24) あいさつの中で(連合岩手) 千葉会長は、今春、消費税率が5%に引き上げられることについて、「可処分所得を確保するには、二兆円を下らない特別減税が必要。益税などの不公平を放置していることも腹に据えかねる」としたうえで(以下略)(1997. 1. 8『朝日』)
- (25) 二十五日正午過ぎ、「改正案参院通過」の報がもたらされると、国会前で抗議の座り込みを続けていた新日本婦人の会事務局の古田和子さん(五〇)は「残念どころか、はらわたが煮えくり返る」と顔をゆがめた。(1998. 9. 26『朝日』)
- (26) 親しくしていた彼は大阪生まれの大阪育ち。でも国籍が韓国というだけで選挙権がないのだ。「せっかく選挙権持ってんのにいかな損やん。行けへん言うやつ多いからムカツクわ」(1998. 7. 20『朝日』)
- (27) (講師師の宝井馬琴さんは)「何か燃やすものをみつけないと、やっていられない。みんなと同じものは嫌い。(中略)」。つむじ曲がりだから、自分でつけた号は「曲軒」。英語で講談を始めたのも、英語の落語があると知って「いつも落語界ばかり張り切っているのは、しゃくにさわる」と、思ったからだ。(1997. 2. 1『朝日』)

以上の例の様に、基本形で発話時点の感情の生起の状態が表せるということは、これらの動詞（句）が状態動詞に近い性質があるということを示していると言える。参考のため以下に状態動詞の例を示す。

- (28) 机の上に本がある。
 (29) 明日までにどうしても論文のコピーが要る。
 (30) AとBでは性質が異なる。

また町田(1989)は、テイル形と状態性の関連について、「日本語においては「ル」形で発話時点における状態を意味することのできる動詞が、その意味に含まれる「状態性」という観点から2つに区分されている。そして状態性の劣る部類の動詞については、「ル」形だけでなく、「テイル」形もが、「現在」を表示しうるのである。」(p. 59)と述べ、その様な性質を持つものに、思考動詞、知覚動詞を挙げている。この記述はすなわち、「思考動詞・知覚動詞」が基本形のみで現在を表す「ある」「要る」のような状態動詞ほど状態性は強くないものの、「異なる」の様な状態動詞の状態性に近いことを示している。本稿では例(22)~(27)に挙げた「アタマニクル、ハラガタツ、ハラニスエカネル、ハラワタガニエクリカエル、ムカツク、シャクニサワル」がこれに当たる。つまり、感情動詞の中には「状態動詞と連続性のあるもの」が存在するのであり、この性質は思考動詞や知覚動詞とも共通する。このことはテイル形によってのみ現在を示すことのできる継続動詞—町田によれば感情動詞はここに位置づけられる—とは性質が異なることを示すものである。また上に挙げた動詞(句)の中で、「シャクニサワル」はテイル形自体を伴いにくい⁽¹⁵⁾。

- (31) a. 花子が先生にほめられるのがシャクニサワル。
 b. 花子が先生にほめられるのが??シャクニサワツテイル。
 (32) a. 「くだらない。投票所に足を運ぶのさえしゃくにさわる」。
 (1998. 7. 10『朝日』)
 b. 「くだらない。投票所に足を運ぶのさえ??シャクニサワツテイル。」

上で見た町田の記述に即して考えれば、「シャクニサワル」の様に専ら基本形で現在を表し、テイル形が許容されにくいものは、状態性があるとする他の動詞(句)「ハラガタツ、アタマニクル、ムカツク、ハラニスエカネル、ハラワタガニエクリカエル」よりも更に状態性が強いと言える。

2.3.2 「観察記述」的か「表出」的か(中道・有賀(1993))

中道・有賀(1993)によって、感情表現には、観察記述的なものと、表出的なものとの大別されるとの指摘がある。中道・有賀は、寺村(1982)の感情表

⁽¹⁵⁾ 「「シャクニサワル」がテイル形を伴いにくい」という判断は、日本語母語話者に対するアンケートと、データベースによる検索結果(1984年~1999年の「朝日新聞」および「アエラ」に127件掲載中テイル形は0件)によるものである。

現の四分類を例に挙げて説明している。

寺村（1982）は、感情表現を「一時的な気の動き」「能動的な心の動き、積極的感情の発動」「感情の直接的表現」「感情的品定め」の四種に分類しているが、ごくおおまかに言えば、これらのうち、オドロク・オロオロスル等、感情が何らかの表情や身体の動きになって現われることを表す「一時的な気の動き」、および事物がある感情をひきおこす性質を持つことを表すバカバカシイ・オソロベキダ等の「感情的品定め」は、感情の主体や感情の契機となる事物を外部から描写する観察記述的表現である。一方、愛スル・憎ム等の感情の動詞を述語とする「能動的な心の動き」と、恐イ・オソロシイ等の感情形容詞を述語とする「感情の直接的表出」とは、どちらも観察記述的表現としての他に、話し手の感情を直接表明する表出的表現としても用いられる。（p. 85）（下線は引用者）

以上の中道・有賀の記述をまとめると次のようになる。

(33) 「一時的な気の動き」「感情的品定め」=観察記述的

「能動的な気の動き」「感情の直接的表出」=観察記述的でも表出的でもある

例えば「ハラガタツ」は上記の分類の「観察記述的でも表出的でもある」に相当する。つまり、1人称感情主の場合「(私は)ハラガタツ」は基本形で「表出」に使える表現であり、「私はハラガタツテイル」と自己の感情をテイル形でも表現可能である。

それでは本稿での他の分析対象語句が果たして(33)の様に分類可能かを以下で検討する。尚、分類に当たって本稿では「表出」とは以下のことを指すものとし、これにあてはまらないものは「観察記述」的とする。

(34)「表出」とは、基本形のみで感情主の感情を表せることを意味する。

他のいかなる要素（例えば「よく」の様な頻度を表す副詞や、「太郎に(が)」の様な対象）も伴ってはならない。いいかえれば「～！」の形で表現が可能なのである。

「表出」的なもの：「ハラガタツ、アタマニクル、ムカツク」

更に「観察記述」的に分類されたものであっても、テイル形を伴わずに基本形で感情主の感情を表せるものもある。それ故「観察記述」的なものの中でも、対象を伴えば基本形を用いて感情主の感情を表せるものを別に認めることにする。これを「準表出」的とし、両者の中間的なものとして位置づける。

「準表出的なもの」：「ハラニスエカネル、ハラワタガニエクリカエル、シャクニサワル」

(35) 太郎のわがままがハラニスエカネル。

(36) 経営者側の容赦ないリストラにハラワタガニエクリカエル。

(37) 花子のものの言い方がシャクニサワル。

「観察記述」的なもの：「オコル、イカル、ハラヲタテル、イキリタツ、イキドオル、フンガイスル、ゲキドスル、ギャクジョウスル、カンニンプクロノオガキレル、キレル、カンシャクヲオコス」

この11語句はテイル形を伴って、感情主の感情を表す。しかし「カンニンプクロノオガキレル、キレル」は瞬間動詞（句）であるが、テイル形よりタ形の方が落ち着きがよい。また、「カンシャクヲオコス」が他の語句が問題なくテイル形を伴うのに比べ、多少許容度が落ちると感じられる⁽¹¹⁶⁾。

(38) あの子は、お弁当に自分の好きなおかずが入っていないくて？カンシャクヲオコシテイル。

前節で「基本形で感情の生起の状態を表せる」動詞（句）として、「ハラガタツ、アタマニクル、ムカツク、ハラニスエカネル、ハラワタガニエクリカエル、シャクニサワル」を挙げたが、これらは本節の分類では「表出」的なものと「準表出」的なものに分かれることになる。また、「観察記述」的なものはテイル形を用いないと感情の生起の状態を表すことができない。これは町田(1989)の「感情動詞」の記述に相当するものであり、寺村(1982)の「一時的な気の動き」に相当する。しかし、「カンシャクヲオコス」の様に、テイル形にすると多少許容度が落ちるものもあることが本節で確認された。

2.3.3 「習慣」を表す基本形

町田(1989)では、継続動詞と瞬間動詞の基本形は現在の習慣を意味することが示されている。例を見てみよう。

(39) 太郎は速く走る。(継続動詞) (p. 36)

⁽¹¹⁶⁾ この様に「カンシャクヲオコス」のテイル形の容認度が落ちるのは、「カンシャクヲオコス」が瞬時性を表していることによるものと思われる。但し、瞬間動詞は「鳥が死んでいる」「車が止まっている」の様にテイル形で「結果の残存」を示す。これに対して「カンニンプクロノオガキレル、キレル、カンシャクヲオコス」がテイル形を伴いにくいのは、事態が瞬間的に生起し、尚かつその「結果の残存」を示しにくいことによると現時点では理解している。しかし、この点については更なる考察が必要である。

(40) 太郎は旅館では早めに眠る。(瞬間動詞) (p. 44)

(括弧内は引用者による補足)

それでは本稿での分析対象語句で、1人称および3人称が感情主の場合はどうなるだろうか。1人称感情主の場合は自分についての習慣（または性質）を全て表すことができる様に思われるのだが、実際には「イキリタツ、イキドオル、ギャクジョウスル」は言いにくく、テイル形を伴っても許容度は落ちる。また、3人称（感情主）については、金水（1989）が以下の様に述べている。

三人称を主語とし、モダリティ^(注17)を伴わない文は、「語り」にしか用いることができない。 (p. 125)

金水のこの指摘によると、日常会話における3人称感情主の太郎の習慣（または性質）を表すのは、基本形ではできないことになる。では3人称感情主を例にとって確かめてみよう。

(41) 太郎は小さなこと（で）もすぐオコル／ハラヲタテル／アタマニクル／ムカツク／キレル／ゲキドスル／イキリタツ。

上に挙げた動詞については、3人称感情主の習慣を基本形で表し得ることがわかる。また一般的な傾向（または真理）を表すものとして、

(42) 家に忍び込んだ犯人（というもの）は（住人に見つかると）ギャクジョウスル。

という文も可能になる。これらの例によって、習慣や一般的傾向（または真理）を表す場合は、3人称感情主でも基本形で表し得ることがわかる。

2.4 「タ」形に関する考察

本稿での対象とする語句には、タ形で過去を表していないと思われるものがある。それは瞬間動詞（句）の「カンニンブクロノオガキレル、キレル」のタ形である。

(43) いつまでたっても煮え切らない花子の態度に私は？カンニンブクロノオガキレテイル／カンニンブクロノオガキレタ。

(44) 花子のわがままに太郎は？キレテイル／キレタ。

上の(43)(44)のタ形は「過去」を表しているとは言い難く、感情が変化した瞬間を表していると捉える方が妥当と思われる。この点に関して町田が、感情動詞（句）に部分的に類似した性格を持つ「思考動詞」について以下の様に記述している。

「思考・信念」を意味する動詞の「タ」形は、思考や信念をもっていない

^(注17) ここでの「モダリティ」とは「らしい／ようだ」等の成分を指す。

状態からもっている状態への変化である。

- (45) a. 私は花子が美しいと思った。
 b. あなたは花子が美しいと思った。
 c. 太郎は花子が美しいと思った。 (p. 75) (下線は引用者)

この様に町田は思考動詞のタ形を「変化」と捉えている。また堀川 (1991) もこの「タ」を「現在を表す「タ」」として説明している。また「基本形またはテイル形で、発話時点の状態すなわち「現在」を表すことができるか」という観点で分類を行っている本稿の趣旨からも、瞬間動詞 (句) のタ形が「過去」を表しているということでは妥当な分類をしたことにはならないと思われる。よって、町田や堀川の指摘を本稿の「感情動詞」にも援用できるものとし、瞬間動詞のタ形を、「変化」を表すものとする^(註18)。

3. まとめと今後の課題

本稿では、「感情動詞」の「テイル形、基本形、タ形」を取り上げ、「怒り」を表す動詞 (句) の場合、「人称」との関わりにおいてどの様なふるまいをするかを考察した。まず、2.2ではテイル形の意味には従来のアスペクトの意味としての「継続性」があり、更に柳沢によって提唱されたテイル形の非アスペクトの意味としての「報告性」があることを見た。これは驚見の「モダリティの意味」に相当するものである。

続く2.3では本稿の分析対象語句に基本形で感情の生起の状態を表せるものがあることを見、更にそれを「表出」的なものと「準表出」的なものに分けることが可能であることを示した。そして、それ以外のものは感情を「観察記述」する性質があり、基本形ではなくテイル形によって表されるものである。そしてこの「観察記述」的性質こそが、従来町田や寺村で言われている「感情動詞」の性質に相当する。

^(註18) むろん「変化」を表すのは「カンニンブクロノオガキレル、キレル」の様な瞬間動詞 (句) だけではない。例えば、相手の様子を見ていて「あ、オコッタ」と表現することも可能である。この場合のタ形も、過去を表すのではなく、報告者の眼前で起きた「怒っていない状態から怒った状態への変化」を表している。しかし、「オコル」はテイル形で発話時点の感情の生起の状態を問題なく表すことができる。それに対し「カンニンブクロノオガキレル、キレル」は、テイル形よりもタ形の方が落ち着きがよいことは既に見た通りである。従って「テイル形で許容されにくい場合、タ形で許容されればよいことにする」という設定を設けるために、「過去」以外のタ形の意味を規定するのが本節の目的である。

また2.4では「カンニンプクロノオガキレル、キレル」の瞬間動詞（句）がタ形で変化を表すことを指摘した。これは町田（1989）の思考動詞に関する記述と重なる性質である。

この様に、「怒り」という部分的な「感情動詞」を見ただけでも、その性質は従来の指摘と異なり「継続性」「状態性」「瞬間性」と多岐に渡り、他の種類の動詞（思考動詞・知覚動詞）との関連性もあることが明らかになった。今後はこの結果を基に、「怒り」と連続的と思われる他の感情についても考察対象を広げ、「感情動詞」の性質をさらに追求してゆく必要があると考えている。

実例採集

『朝日』 朝日新聞記事データベース (Digital News Archives for Library)
『元祿繚乱』 NHK大河ドラマ

参考文献

- 池上嘉彦（1993）「訳者解説」『認知意味論』（レイコフ、ジョージ（1993））紀伊國屋書店 pp. 745-763.
- 井上和子（1989）「V テンス・アスペクト」『日本文法小辞典』（井上和子編）大修館書店 pp. 167-190.
- 金水 敏（1989）『報告』についての覚書『日本語のモダリティ』（仁田義雄・益岡隆志編）くろしお出版 pp. 121-129.
- 金田一春彦（1976=1950）「国語動詞の一文類」（『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦編（1976）に再録）むぎ書房. pp. 7-26.
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房 pp. 5-220.
- 鷺見幸美（1996）「テイルの意味機能」『名古屋大学日本語・日本文化論集』第4号 名古屋大学留学生センター pp. 41-63.
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版 pp. 139-154.
- （1984）『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版 pp. 65-182, 223-260, 313-358.
- 中道真木男・有賀千佳子（1993）「感情表出表現における副詞のはたらき」『日本語学』Vol. 12. No. 1. 明治書院 pp. 85-93.

- 中村 明編 (1993=1979) 『感情表現辞典』 東京堂出版.
- 仁田義雄 (1978) 「日本語の感情表現」『感情表現について (日本語教育のための日本語と外国語との「格」の対照研究) -中間報告-』大阪外国語大学留学生別科. pp. 2-11.
- (1987) 「テンス・アスペクトの文法」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究8 -IPAL補完文法-』情報処理振興事業協会 pp. 51-135.
- (1999) 「モダリティを求めて」『言語』Vol. 28. No. 6. 大修館書店 pp. 34-44.
- 堀川智也 (1991) 「心理動詞のアスペクト」『言語文化部紀要』21. 北海道大学 pp. 187-201.
- 町田 健 (1989) 『日本語の時制とアスペクト』アルク.
- 宮地 裕編 (1982) 『慣用句の意味と用法』明治書院.
- 柳沢浩哉 (1994) 「テイル形の非アスペクト的意味-テイル形の報告性-」『森野宗明教授退官記念論集 言語・文学・国語教育』三省堂. pp. 165-178.